

百尺竿頭、一步を進むべし

上 廣 榮 治

本部旗支部旗の堂々の入場、橋本総理はじめ錚々たる来賓の方々の熱い思いに溢れたご挨拶、音と光で演出された人間讃歌、万余の会友の歓喜に満ちた顔、顔、顔……大成功裡に幕を閉じた創立五十周年記念式典の興奮未だ覚めやらぬ日々であります。それもこれも、偏に会友各位のたゆまざる精進と努力の成果であることは改めて申し上げるまでもありません。しかし、だからこそ、敢えて辛口の言を呈することが会長の責務と心得、以下、論を進めてまいりたいと思います。

ご承知のように、五十年前、あの人類が経験した最も悲惨な状況、広島の廃墟の中から、先師は日本再生への情熱と勇気を奮って、「倫理立国」を提唱いたしました。以来、明日への展望もなく、その日の食にも事欠く混乱した社会の中で、また金銭のみを追い求め、飽食に奢る社会にあっても、実践倫理宏正会は十年先、五十年先、百年先の明日を見据えた倫理実践の正道を歩み続けてまいりました。

しかしいつの世も、正しい道は容易に受け入れられることはありません。人は常に、目先の不安や欲望に支配されやすいものだからです。にもかかわらず、志を同じくする会友たちの文字通り寝食を忘れた献身的な努力によって、私たちは荒廃した世相の中に倫理の灯火を掲げ続けてまいりました。そして、私たちの同志は次々と増え続け、今や支部の数二百六十九、会場まで含めるとその数七百数十にも上る勢いで

す。私たちにとつてのこの五十年は、誠に実り多き五十年であったと思います。しかし、そう評価したうえで、敢えて私は五十周年の節づけとして次の言葉をみなさんに贈りたいと思います。「百尺竿頭、一步を進むべし」と。

これは、もともと中国唐代の禅僧、長沙景岑（ちやうさけいじん）の言葉です。「百尺竿頭」とは百尺もある竿の先のことです。そこから、そこにいる人は当然ながら他の人々よりもずっと傑出した人、高みにいる人です。彼は人として最も高いところにいるといつてもよいかもしれません。

ところが、なお「百尺竿頭に坐する人、然も得入すと雖も未だ真となさず」というのです。他人をはるかに絶して傑出した人、最も高いところにおいて、しかも「得入している」、つまり悟りを得た人であるとしても、彼を「真となさず」、彼を本物だというわけにはいけません。まだまだなのだ、ということです。そして、「須く一步を進むべし」、百尺の竿の先から、もつと高みに向かつて歩を進めなければならないぞ、と教えるのです。

実のところ、この言葉の真意は「まだまだ」どころではないのです。禅家では、悟ったといつて安心している人、高みに達したといつて人を見下す人、これらを「野狐禅（やこぜん）」といつて、ひどく軽蔑さえするのです。悟りに安住した瞬間に、もう悟りの境地から、ただの凡俗に墮ちてしまっているからです。

然り、実践倫理宏正会も過去五十年にわたる必死の努力で、今やあるいは百尺竿頭にいるのかもしれない。倫理の大道において私たちの前を歩む人々は、今現在においてははいないのかもしれない。しかし問題は、今どこにいるかではありません。今、他の人々よりも高みにいるからといって安心してはならない、この一事が大切なのです。今、この瞬間から、更なる高みに向かつて歩を踏み出すこと、それこそが大切なのです。

五十周年という大節にあたり、過去の努力を評価し先人の偉業を讃えることは大切なことでしよう。しかしそれが、よくやった、立派だったと仲間褒めをすることであつたり、今に満足し、安心し、慢心する

ことであつてはならないと、逆に自戒すべき時なのです。

実践倫理宏正会は五十年を迎えたからめでたいではありません。ただ五十年ということだけならば、それは単なる一つの通過点に過ぎません。もしも祝うべきことがあるとすれば、五十年の長きにわたつて、常に竿頭から、より高みを目指して次の一步を踏み出し続けてきた、このためまぬ実践の態度そのものにこそあるのです。

先師が戦後の焼け跡に立ち敢然と倫理立国を提唱した時、当時の日本人は誰もが、それどころではない、心の貧しさよりも物の貧しさだ、倫理などは迂遠な道だと笑つたはずでした。しかし、今から振り返れば、先師は既にその時、百尺の竿頭に立つていたはずでした。当時においても既に傑出した高みに達していたのです。しかし、先師が真に傑出していたのはその後の生きざまでした。先師は一瞬たりともその高みに留まることなく、日々飽くことなく、命を削つてまで歩を進めました。一度も振り返ることなく、安住することなく、もちろん後戻りすることも安易に墮することもなく、前へ前へと歩み続けました。

そして私たちも、立ち止まることを許されてはおりません。何故なら、私たちは時の流れの中に生かされているからです。時間の経緯とともに移ろう生命を抱いて生きています。つい昨日まで「可」であつたことが、今日はもう「不可」となる。そんなことは多々あります。人生のそうした機微を先師は深く悟つていたのです。だからこそ、日々新たな決意をもつて生きることの大切さを強調する意味で、朝の誓五か条のそれぞれの冒頭に「今日一日」の言葉を付してあるのです。

人は今現在の幸福や成果に満足し、そこに安住しがります。ずっとこのままだったらいいのにと、誰もがそんなことを思います。しかし、それは不可能な望みです。時は休みなく移ろい、状況は刻々と変化して、形ある物の変貌し、やがて滅びるのです。

私たち人間は、生きている限り、その一瞬の心境に留まることはできないのです。留まりたいと思つても、時間は容赦なく経過してしまいます。ある境地に留まるためには、その後の変化に目をつむり耳を閉

